

# デジタル学習環境における外国語教育の言語活動指導事例

立松 大祐

愛媛大学教育学部

## Using ICT to Encourage Student-led Discussions in EFL Classes

Daisuke TATEMATSU

Faculty of Education, Ehime University

### 1. はじめに

OECD (2018) は、2030 年代以降に生きる世代の子どもたちに身に付けさせたい3つの力を提案している。それらは、「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマを克服する力」「責任ある行動をとる力」である。つまり、生徒は他者と互いの価値観を尊重し認め合い、他者の考えから新しい知識を生み出し、失敗や否定されることに対応し、自己調整の力を身に付けることが期待されるのである。これらは、新学習指導要領（文部科学省、2018a）にも反映されている。また、OECD は、複雑で不確かな世界を歩んでいくには学習者のエージェンシーの発揮が必要であるとしている。その実現には、「一人ひとりにカスタマイズされた学習環境」と「しっかりした基礎力」が必要であり、特に読解力と数学力は重要であることを強調している。

全国の小学校、中学校では、2021 年度から政府の推進する「GIGA スクール構想」により、「1 人1 台のパソコン端末」に象徴される ICT 環境が整備された。授業ではそれらの学びのツールを積極的に活用し、新学習指導要領で目指す「主体的・対話的で深い学び」の実現へと向かうことになった。小・中学校では児童生徒がパソコンやタブレットを学びの「道具」として活用できるよう、授業実践が続けられている。その一方、経済産業省サービス政策課長・教育産業室長の浅野（2021）は、教育 DX（Digital Transformation: 以下、DX と記す）推進のため各学校に整備された端末が、十分に活用されず「デジタル文鎮」となるか、主体的・対話的で深い学びへの転換のための「道

具」になるかの岐路にあると危惧している。

本稿では、ICT 学習環境を活用した中学校での言語活動指導事例を二つ報告する。特に、筆者が指導助言を行っている A 中学校と B 中学校で実践されたリテラチャー・サークル（Literature Circles: 以下、LC と記す）という、英文を読んでグループで話し合う言語活動において、ICT 機器がどのように活用されているのか、生徒の活動中の様子も踏まえて報告する。さらに、ICT 機器使用の利点と課題も含めて、今後、教育 DX が推進される中で、LC 実践の指導方法についても議論する。

### 2. 英語教育における ICT 活用推進の背景

現代社会は先行きの分からない予測困難な社会であると言われており、政府は第5期「科学技術基本計画」で超スマート社会（Society 5.0）を提唱した。Society 5.0 は、ICT や先端技術の飛躍的發展により、新たな価値を創出し、多様なニーズに対応したサービスなどを提供する新たな時代であるとされている。急速に変化する社会に対応すべく、学校教育は持続可能な社会生活を実現するための人材育成を目指して変革しつつある。例えば、AI 型教材や EdTech が発達し、学習者の学びの個別最適化の実現が期待されている。EdTech とは、Education と Technology を合わせた造語であり、ICT を活用した教育分野におけるサービスなどを指し、デジタル教科書やデジタル教材、学習ログ、遠隔・オンライン教育などが含まれる。例えば、学習ログにより学習者の学習到達度や評価を踏まえて、個

別の学習計画や学習コンテンツを提示することができるのである。このように「GIGA スクール構想」のもと、学習者の学びの在り方も変化する可能性がある。さらには、一斉授業や同一学年集団での学習という学校のシステムも変革していく可能性があることが示唆されている。教員に求められる力として、ICTを活用した指導力、問題発見・解決型の学習を計画し実現する力、個別最適化された学びを実現する力、多様な意見や学び合いを引き出す力などが示されている（文部科学省，2018b）。

英語教育について文部科学省は、英語教育改善のための具体的な施策の現状について調査し、国の施策の検討資料とするとともに、各教育委員会における英語教育の充実や改善に役立てるため、英語教育実施状況調査を実施している。調査対象は各都道府県・市区町村教育委員会とすべての公立小・中・高等学校である。新学習指導要領では、ICT環境を活用し、指導の効率化と言語活動の充実を図るよう求めており、調査にはICT機器の活用状況の項目も含まれている。

表1 小・中学校におけるICT機器の活用状況

（令和3年度英語教育実施状況調査の結果を改編）

小学校：18,862校，中学校：9,252校

	小学校	中学校
1. ICT機器の活用を行った学校の割合	99.9%	99.9%
「コンテンツ・授業運営」		
2. 教師がデジタル教材等を活用した割合	99.7%	98.8%
「言語活動・練習」		
3. 児童生徒がパソコン等を用いて発表や話すことにおけるやり取りをする活動	80.1%	86.2%
4. 児童生徒が発話や発音などを録音・録画する活動	54.7%	66.5%
5. 児童生徒がキーボード入力等で書く活動	54.4%	76.5%
6. 児童生徒が電子メールやSNSを用いたやり取りをする活動（「交流・遠隔授業」にも分類される。）	3.1%	8.1%
「交流・遠隔授業」		
7. 児童生徒が遠隔地の児童生徒と英語で話をして交流する活動	8.6%	7.7%
8. 遠隔地の教師やALT等とチーム・ティーチングを行う授業	6.5%	6.9%
9. 児童生徒が遠隔地の英語に堪能な人と個別に会話を行う活動	3.8%	5.2%

表1は、令和3年度の調査結果（文部科学省，2022）を、小・中学校（小学校：18,862校，中学校：9,252校）に絞り編集を加えたものである。表中の6番の調査項目は、「言語活動・練習」と「交流・遠隔授業」の両方に分類される。ICT機器を活用していると回答した割合は小・中ともにほぼ100%であり、英語の授業では何らかの方法でパソコンなどが使われていることが分かる。具体的な内容を見ると、「コンテンツ・授業運営」に分類される「教師がデジ

タル教材等を活用した授業」をしていると回答した割合は、小・中学校ともにほぼ99%である。

「言語活動・練習」に分類される活動では、発表ややり取りをする活動は小・中学校とも80%を超えている。児童生徒が発話を録音・録画したり、キーボードを使用したりする活動では中学校は小学校よりも10%以上多く実施していることが分かる。図1は、愛媛県内の中学校で実践された、ICTを活用した「言語活動・練習」にあたる活動例である。生徒はサーバーにアクセスし、ALTが教科書本文の内容を説明したり、本文を音読したりする映像をiPadに取り出し、個別に視聴し本文の音読練習を行い、自分の音読を録音して提出するなどの活動が行われた。この例のようにICTを活用すると、生徒は必要に応じて動画を簡単な操作でくり返すなど、自分のペースで英語の学習をすることができる。立松（2018）は、コロラド州のミドルスクールでのICTを活用した学習として自主読書（independent reading）を紹介している。生徒は1冊の本を読み、リーディング・ログを書き、Google DocumentとGoogle Surveysを活用して教員とやり取りを行う取組であり、このような活動もICTを活用した「言語活動・練習」である。



図1 タブレットを活用した言語活動・練習例

「交流・遠隔授業」に分類される活動をしていると回答した割合は、小・中学校とも10%にも満たない状況が明らかになった。文部科学省（2020）は、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の統合的言語活動として、プレゼンテーションやディスカッションの準備、動画の作成と共有、遠隔地や海外の学校等との交流、電子メールやSNSでのやり取りなどを例として紹介している。



図2 市内のALTとの交流・遠隔授業例

図2は、愛媛県の小学校で実践された「交流・遠隔授業」の様子である。児童は事前に市内のALTとオンラインで交流し、その人の好きなものなどを把握するインタビューを行った。その後、そのALTにおすすめの昼食メニューを作る授業を経て、オンラインでおすすめのメニューを紹介し、やり取りする学習を行った。表1の英語教育実施状況調査において「交流・遠隔授業」に分類される学習活動は、児童生徒にとって貴重な学びの機会になるが、実施状況が低い。遠隔で交流する際には相手方と綿密に計画をすり合わせることに加えて、教室では複数のグループのマネジメントと機器の不具合があった際の対応策を考えるなど、実践する上でかなりの課題と困難さがあると推察される。しかしながら、文部科学省による英語教育実施状況調査の分析では、中学生の英語力向上には、「生徒の英語による言語活動時間」「英語教師の英語力」「ICT機器の活用」が影響を与えると報告しており、交流・遠隔授業を含んだICT機器を活用した実践の工夫が求められている。

### 3. ICTを活用したリテラチャー・サークル実践

まず、リテラチャー・サークル(LC)とはどのような言語活動であるかを概観した後に、中学校で行われたICTを活用した指導事例を報告する。

#### 3.1 リテラチャー・サークル(LC)

外国語として英語を学ぶ日本の教室では、LCとはある程度のまとまった分量の英文を読み、その内容についてグループで話し合う学習者主導の協同学習である。4人グループの場合は、生徒にはそれぞれ異なる読みの役割が与えられ、その役割に応じて話合いの準備を行う。基本的な読みの役割はQuestioner, Summarizer, Connector, Illustratorであり、生徒は役割シートの指示を理解してから英文を読むことになる。Questionerはグループのメンバーが英文内容を理解するための質問リストを作ること、Summarizerは英文内容を英語で要約すること、Connectorは英文内容とつながりのある生徒自身の経験や学校や社会での出来事等を探ること、Illustratorは読んだ内容から重要だと感じた場面やポイントとなる場面を描写することが役割である。話合い活動の前に役割シートを書く時間を与えることは、生徒にとって話すことの足場かけになると考えられる(Fu & Matoush, 2015)。つまり、本文を読んで読みの役割の指示に従って英文を書くことを通して語彙や文法などの言語知識が整理され、そのことが生徒に英語で話すことを促すのである。

LCの指導は図3で示す一連の流れを基本に進められる。役割シートの準備をした後は、ミニ・レッスンをを行う。ここでは、話合いで役に立つ英語表現を学習したり、前時の

話合い活動の録画を用いて活動の省察を行い、よりよい話合いをするための改善点などを確認したりする。ジグソー学習は異なるグループから読みの役割が同じ生徒が集まりグループをつくり、互いに準備をしたことに対して質問をしたり助言をしたりする段階である。この学習は生徒に自分の学習に自信をもたせることができる。その後、生徒は元のグループに戻り、英文内容についての話合いを約15分間にわたり続けるのである。振り返りは主に振り返りシートを用いて、話合い中にうまくできたことや課題などについて記し、その内容をクラス全体に報告してグループ活動で話し合った内容や課題の共有を行うこともある。

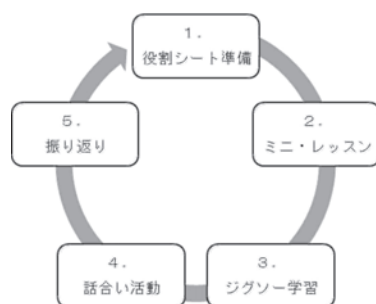


図3 LCの指導手順(立松・河野, 2020)

#### 3.2 ICTを活用したLC実践①

立松・河野(2020)は、愛媛県内のA中学校において、2017年度から先駆的に行ったLC実践を報告した。A中学校は国立大学教育学部附属の学校であり、ICT機器は各教科において積極的に活用されている。実践当初は中学3年生の生徒が新しい言語活動にうまく対応し、グループでのコミュニケーションがスムーズに行われるのか懸念された。指導教員は話合いをうまく進めるための司会用の原稿(図4)を作成したり、対話をうまく進めるための表現集などを作成したりして生徒のコミュニケーションを支援していた。これらの支援が功を奏し、生徒は15分間のグループでの話合いを継続させることができた。その後、他の教員も実践できるLC指導モデルの構築を目指して複数回の実践が行われた。その様子はビデオ撮影され指導者の授業の省察として活用された。

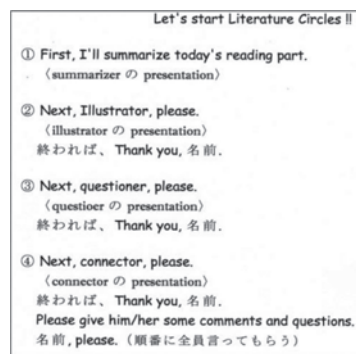


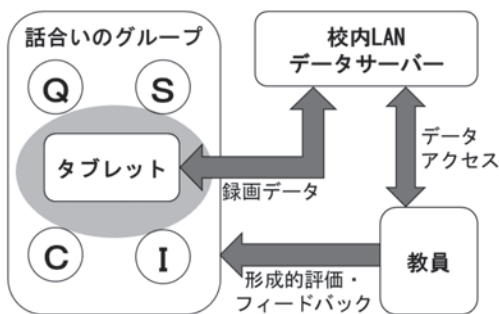
図4 LCでの司会用表現集

一般的に教室で生徒にペアやグループ活動をさせると、それぞれが声を発するので一見すると活発に英語で話しているように見える。LCでの話し合いにおいても生徒は積極的に英語を使用して話し合いを行っていることが観察された。一方、このような活動では、教師は生徒が英語で何を話しているのか把握できないという課題があった。教師は一つのグループを観察していると他のグループの様子が分からず、全体的には英語を話しているように見えるがその詳細が分からないのである。LCを行うことによって生徒はどのようなことを話しているのか、話し合い活動の改善点は何かを把握するため、各グループの話し合いを録音または録画する必要に迫られた。

筆者はLCが行われているアメリカやオーストラリアのクラスの観察をした際に、グループの話し合いを録音している実践に出会った。アメリカに移住して2年以内の非英語母語話者である生徒が学ぶサンフランシスコの高等学校の教室では、各グループにICレコーダーを渡して話し合いを録音させていた。生徒は発言前に自分の名前を述べてから物語に対する自分の考えなどを述べていた。生徒に名前を吹き込ませることで教員は録音データから発言者を特定することができ、学習到達目標を達成しているか確認することができるのである。もう一つの例は、第一言語として英語を学ぶシドニーの小学校の授業である。ここでは、各グループのテーブル中央にiPadを置き(図5)、児童の話し合いを録音していた。担当の教員は児童が何をどのように話しているのかを把握し評価するために録音しているということであった。



図5 話し合い活動の録音例(シドニーの小学校)



Q: Questioner, S: Summarizer, C: Connector, I: Illustrator

図6 LCでのICT活用イメージ

A 中学校には十分な数のiPadが準備されていたため、グループの中央に設置し生徒の話し合いを録画することにした。録音では生徒が話している表情やアイコンタクト、ジェスチャーという言葉外の特徴の把握は難しいため、録画することにした。その際のICT活用のイメージは図6のとおりである。タブレットで録画したデータは校内のサーバーに保存し、教員がそのデータにアクセスして形成的評価やフィードバックを行うことを表している。

図7は教員がグループの話し合い活動の一部を発言のまま文字起こし、ミニ・レッスンの段階で生徒に示したワークシートである。本来は書き起こした英文が左側に、教員のコメントが右側に配置されているシートだが紙幅の都合上、上下に示した。このような話し合いの可視化は生徒に活動を振り返らせるよい機会になり、自分たちの話した内容を真剣に読む姿が観察された。教員にとっても誰が何をどのように話しているか、グループの話し合いはどのように進められるか、話し合いは深い学びを実現しているかなどを把握することができた(立松, 2020, 2021)。

someone who are weak. 弱い, 弱い人達。  
 But if we don't help them, they can't live. So we mustn't be afraid of a big danger and we should help people who are weak. 弱い人達を助ける。  
 A: Thank you, Mr. B. Please give him some comments and questions.  
 A: 誰から行く? 最初の方がいい? (Bを見ながら)  
 B: What do you do?  
 A/C/D: (笑う)  
 D: Why? なんで?  
 B: What will you do?  
 D: What? Why じゃなくて?  
 B: Why?  
 D: Why Stevie が殺されたかってこと?  
 C: Stevie 死んでないよ。  
 B: リンカーン。

---

全班, Connector へのコメントがあまりできていません。  
**対策**  
 ・Connector の話を集中して聞いて、内容を理解する。  
 ・話型を使ってみよう。  
 ・Connector は聞き手の理解を確認しながら話す(これは、どの役割でも)  
 ・聞き手はリアクションをして理解を示す。  
 ・Connector の話の内容の中に、ところどころ、聞き手への質問を入れてみる。

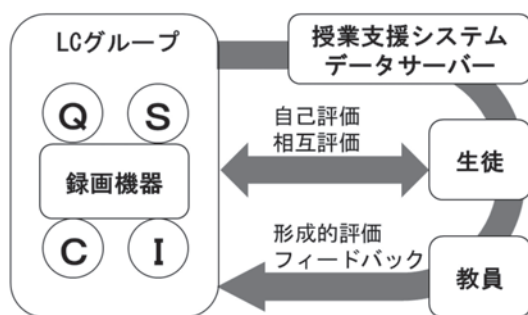
図7 話し合いの文字起こしとフィードバックの例

しかしながら、この録画方法ではカメラレンズの画角の制限により、グループの生徒2人から3人しか表情を捉えられないことが分かった。次に、カメラレンズに広角レン

ズを後付けする方法を試すが、少し改善が見られる程度であった。また、音声面では他のグループの話合い音声まで敏感に拾っておりノイズが多い状態であった。そこで、2020年からは360度カメラを設置するとともに、ロイロノート・スクールという授業支援クラウドシステムを導入した実践を行うことにした。本システムは、操作の簡単さと便利さゆえに多くの学校で採用されている。例えば、かつて紙媒体で使っていた資料はデータとして配布することができたり、カメラ・ビデオ機能を使えば、音声や映像をデータでやり取りしたりできるものである。

360度カメラをグループの中央に設置することで4人の生徒を確実に捉えることができ、話合い音声もクリアに録音できた。さらに授業支援システムを活用することによって、生徒も教員もサーバーのデータにアクセスできるようになった(図8)。つまり、生徒は自分のグループや他のグループの映像データにアクセスして相互評価をすることが可能になったのである。

前掲図3のLC指導手順に照合すると、生徒は「ミニ・レッスン」段階で自グループや他グループの前時に行った活動を動画で確認することができる。「ジグソー学習」では、ワークシートに記入したものを撮影してサーバーに保存すると、他のグループの同じ役割の生徒がその内容を確認してコメントを書き込むなどの意見交流が行うことができる。「振り返り」では自己評価と相互評価をオンラインで実施して記録として残すことができる。



Q: Questioner, S: Summarizer, C: Connector, I: Illustrator  
図8 授業支援システムを活用したLCの学習イメージ

本取組について課題は2つある。まず、360度カメラで撮影したデータはカメラをコントロールするiPad上では再生できるが、授業支援システムにはmp4ファイル形式で保存するため、データの変換が必要である。すべてのグループのデータを変換し保存するのに時間がかかってしまう。次に、話合いを客観的に観察して談話分析をするには対話の文字起こしが欠かせない。教員や研究者がこの作業を担当するとかなりの時間を要する。LCを効率的に進めるためこれらの改善が求められる。

### 3.3 ICTを活用したLC実践②

ここで紹介するのは、2021年度に愛媛県内の公立B中学校の1年生を対象に実践されたものである。本授業は、ほぼすべての場面でロイロノート・スクールを中心にICTを活用していた。その中からLCに当てはまる部分を説明する。指導の手順は図3で示したものと同一である。

図9は「ミニ・レッスン」の場面である。前時に行われた話合いの録画を教室の大型モニターに映し、よりよい対話のためのイメージを喚起させ、気づきなどを促している。画面には生徒が発言した英語を字幕表示にしているだけでなく、話者の違いが明らかになるように字幕帯の背景色を変えている。このビデオを視聴する生徒は、発言者が誰であるか一目瞭然であり、対話全体が理解しやすくなる工夫がされている。

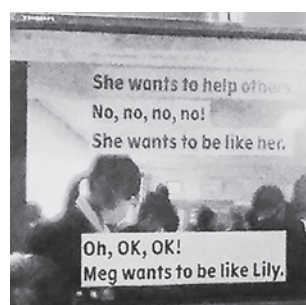


図9 ミニ・レッスンでのICT活用例

「ジグソー学習」は読みの役割ごとに別のグループを組み、生徒が準備した内容についてよい点や改善点などを交流して考える学習である。本実践では、生徒が事前に記入したワークシートを撮影してロイロノートに提出している。他の生徒はサーバーに保存されたワークシートにアクセスして準備した内容を読み、よいと思われる部分や改善が必要な部分については、PCの画面上にアンダーラインを引くなどして互いにコメントができるようにした(図10)。本取組では、手書きのワークシートや話合いをスムーズに進めるための表現集を手元に用意させながらICTを活用する、アナログな部分とデジタルな部分を使い分けている。

各グループの「話合い」はPCに録画するようにした。PC画面には4人から5人の生徒がすべて映るようにグループから少し距離を取ってPCを設置し、十分なコード長のあるPCマイクを接続してグループの中央に設置した。図10のPCの右側にある丸い形をしたのがPCマイクである。今回は約11分間の話合いが行われ、それぞれのグループはその対話を録画し、ロイロノートに提出することができた。この方法は、すべての発言者を確認でき、音声も十分に拾うことができる。さらに、mp4形式のファイルで保存できるため、授業での映像の再利用や、後に教員が授業の省察、会話の分析をしやすくと考えられる。

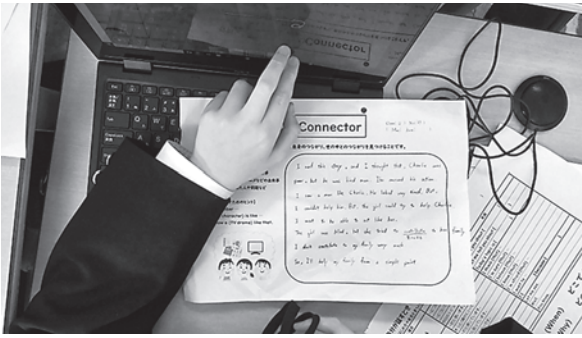


図 10 ジグソー学習での ICT 活用例

本時の学習の「振り返り」は、ロイロノートを活用し、図 11 のように選択式回答と自由記述をさせた。例えば、「自分の考えや意見を英語で相手に伝えようとした」「グループのメンバーの意見にリアクションを返しながらかかりと聞くことができた」などの振り返りの項目に、「Very Good, Good, So-so, Not Good」と書かれた回答を選ばせている。また、「物語から学んだこと、今後の生活に生かしたいと思ったことはどのようなことか」などを自由記述で入力させている。これらの回答はシステムに即座に反映され、大型モニターに回答状況を示すことができる。さらに、生徒が英語で伝えようとしたが表現できなかったことを入力させ、そのうちのいくつかを取り上げて、それらは既習の語句や表現を使って伝えることができることをリアルタイムに確認することができた。



図 11 振り返りでの ICT 活用例

この実践は、LC 指導手順の「ミニ・レッスン」「ジグソー学習」「話し合い」「振り返り」の各段階の学習活動場面に適した授業支援システムの活用と PC と PC マイクの設置がうまく作用している例であり、ICT を活用した LC 実践の新たな可能性を考える上で参考になるものである。

#### 4. ICT を活用した LC 指導方法

これまでの実践例を踏まえ、ICT 環境下で実践できる新しい LC 指導を考えたい。まず、「準備」では読みの役割に従ってワークシートなど紙媒体に記入する方法から、Microsoft Word などを利用する方法もある。先述の B 中学校ではロイロノート・スクールを活用して書いたワーク

シートを撮影して他の生徒と共有する方法で実践していたが、一般社会でより汎用性のあるソフトやアプリを活用して読みの役割の準備や共有する方法も考えることができる。Rothstein and Santana (2011) や立松 (2022) は生徒による質問づくりの場を授業や話し合いに設定することを奨励している。例えば、グループ全員が英文内容についての質問を作成し、授業支援システム上で共有することによって話し合いを深めることができるであろう。また、Bromley, et al. (2014) の LC 実践では生徒にインターネットなどの ICT を活用した調べ学習と準備を課している例もあることから、「準備」の段階においてすべての生徒が ICT を活用することは十分に可能である。久保田・今野 (2018) では、ICT を活用することで、生徒は自分の興味関心に従って学習することができ、インターネット等での資料収集、調査活動、資料の制作を例示している。

A 中学校、B 中学校ともに、「ミニ・レッスン」の段階において生徒の対話を撮影した動画を、よりよい対話を行うための教材として活用している。この方法は生徒にとって実物を見て学ぶ機会となるので効果的である。指導で焦点を当てるのは、言語使用、コミュニケーション・ストラテジー、対話の継続方法、対話の内容などが考えられる。指導の焦点に適した対話の動画をサーバーから簡単に選択して活用できるシステムであれば、ロイロノート・スクールの他、Microsoft Teams や Google Classroom などを使うことができる。また、望ましい対話のための具体的行動を表した自己評価ツール(表 2)を活用することは、生徒の前時と本時の話し合いを客観的に分析させることもできる。自己評価ツールは、英文を読んで話し合う際に生徒に身に付けさせたい内容であり、会話スキル、知識・技能、思考・判断・表現の 3 つのカテゴリーから成る。知識・技能と思考・判断・表現の項目は、観点別評価にも活用できる。これらの項目に、自由記述欄を加えることで、さらに複眼的に指導・評価が可能になり、生徒のメタ認知能力を育成することもできるであろう。

「ジグソー学習」では、B 中学校で行っているようなワークシートを撮影してシステム上で共有し、生徒は他の生徒のワークシート画面に下線を引いたり、コメントを書き入れたりすることができる。紙媒体を使用してジグソー学習をする場合は、生徒は 1 人ずつ準備してきた内容を他の生徒に伝え、それに対するコメントや質問で交流する方法である。他の生徒の意見や考え方を学ぶことができるといふ点でメリットは大きい。少々時間がかかることがある。サーバーに共有されたデータにアクセスする方法は、ジグソーグループの生徒が一斉に他の生徒のワークシートにコメントなどができるため、効率的に進めることができる。

「話し合い」は基本的には対面で行い、その様子は A 中学校と B 中学校と同様に録画をして後の振り返りやミニ・レッスンで活用できるようにする。教員は録画したデータ

を使い生徒の話合いの内容や英語使用などを確認することができる。LCでの話合いは教室内のグループで行うことを前提に考えられているが、GIGA スクール構想以降、学校のネットワークが整備され、遠隔での交流学习も可能になった。つまり、同じ学校の別のクラスの生徒や、校外の生徒とも話合いをすることが考えられるのである。校外とは国内外の学校を意味するものであり、都市部の生徒が地方の小規模校の生徒と、さらに海外の学校の生徒とも LC を実践できる可能性があるのである。

表2 対話のための自己評価ツール

【会話スキル】	評価
1. 積極的な態度と表情で明確に話し、アイコンタクトやジェスチャーを使っている。	1・2・3・4
2. 適切な発言の回数と量で話をしている。	1・2・3・4
3. メンバーの発言内容や考えを生かして協力して話合いをしている。	1・2・3・4
4. メンバーに考えや気持ちの根拠や理由を示したり、考えの理由や根拠を聞いたりしている。	1・2・3・4
【知識・技能】	1・2・3・4
5. 単語から句や文の大きなかたまりで発言している。	1・2・3・4
6. 考えをまとめ、文と文を適切につなげて構成している。	1・2・3・4
7. 重要な語について説明を加えたり別の表現で言い換えたりして、英語で伝えようとしている。	1・2・3・4
【思考・判断・表現】	
8. 情報を選択・抽出して事実を述べたり、自分の考えや気持ちとその理由を述べたりしている。	1・2・3・4
9. 情報を選択・抽出して事実を述べたり、自分の考えや気持ち、内容に対する賛否とその理由を述べたりしている。	1・2・3・4
10. 読み取ったことや感じたこと考えたことを伝えている。	1・2・3・4
11. 内容を整理し自分で作成したメモなどを活用しながら、口頭で要約したり自分の考えや気持ちなど伝え合ったりしている。	1・2・3・4
12. メンバーの発言内容や考えを把握し、適切に応答したり関連する質問をしたりして会話を継続している。	1・2・3・4

(1:できなかつた, 2:少しできた, 3:できた, 4:かなりできた)

最後の「振り返り」の段階においても ICT を活用して指導することはできる。B 中学校のように、授業支援システムのアンケート機能などを使って生徒は自己評価をすることができる。例えば、表2で示した「対話のための自己評価ツール」による振り返りを学習ログに組み込むことにより、生徒と学習成果と課題、課題となる知識やスキルについての補強策を話し合うなどの個別指導が可能になる。つまり、一人ひとりの習熟度に応じた学習ができるのである。

現状では ICT を活用した「交流・遠隔授業」の実施状況割合の低いことを確認したが、LCはこの状況を改善できるかもしれない。読んだ内容について話し合うことが LC の核心であり、他の学校と交流する際には読んだ内容とそのトピックをめぐる意見交換が交流の最大の理由であり、継続的に学校間交流が実施される可能性がある。交流をする材料と理由が明確であるという点において、LC は ICT を活用した「交流・遠隔授業」に向いているかもしれない。さらに、国内外の他校の生徒との対話は、生徒にそれまでの教室では出会わなかった新しい考え方や価値観、異文化に気づかせる学習の機会を創出できるかもしれない。意見の交流や学び合いの場面はアナログがよいのかデジタルが適しているのかについては、今後の実践の積み重ねによる検討が必要であるが、ICT を使った LC 学習では生徒は学ぶ楽しさを見つけられる可能性がある。

## 5. まとめ

生徒は LC での話合いを通して、他の生徒の考え方や感性に触れ、新しい価値観を学び、自分の学習方法を見直して修正するなど自己調整の力を身に付ける。また、時には英文内容についての自分の意見が根拠不足などの理由で他の生徒から解釈について指摘や反対意見があったり、感情的な理由で話合いでの振る舞いを失敗したりすることもある。そのような他者との真剣なやり取りから、生徒は読解力を高めることができる。つまり、LC での学習は生徒に「VUCA」(不安定、不確実、複雑、曖昧)が進展する世界で生きるための基礎的な力を育むことができる可能性があるのである。他者との協働で行う LC は、ICT の活用によってクラス内だけでなく、学校内の他クラス、校外や海外を含む多様性のある生徒たちと行うことができる。クラス内外の生徒とつながるために教員はインターネットなど ICT 環境を整備し、生徒には ICT リテラシーを身に付けさせることは最低限必要であり、学習段階に適した ICT 機器等を自分で判断して使用できる知識とスキルも身に付けさせたい。

LC を行う「交流・遠隔授業」が実践されるとき、教員は生徒が読み物の理解を基盤にして疑問点やトピックを自分ごととして捉えられるよう支援し、地域や文化が異なる他者との話合いを創造するための英語コミュニケーション能力を生徒に身に付けさせることが求められる。例えば、賛成や反対など意見の伝え方やリアクション、議論を行うための基本的な表現は事前に学習する必要がある。また、生徒に曖昧さに耐えることが英語学習には欠かせないことを伝えることも重要である。対話は英語学習者同士、あるいは英語話者で行われることもあり、生徒は予想外の英語インプットにさらされる場合もある。互いの意見を辛抱強く理解しようとする態度となんとか英語を使って表現する

経験が、学習動機と対話の質的向上につながり、英語で自分の考えを伝える力の向上へと導くものと考えられる。

教員養成のための大学の授業においては、Society 5.0時代に求められる教育DXやブレンディッド・ラーニングなど個別カリキュラムを視野に入れた教育システムへの理解を深めること、ICT機器やEdTech教材への理解と授業での活用方法を考える機会を拡充することが重要である。また、LCでの対話のような「交流・遠隔授業」が可能な言語活動を学習者と指導者の立場から学習することも必要である。これらを実現するためには、インターネットを基盤とした英語を学習するための生徒の対話コミュニティやグループのネットワーク(Hanson-Smith, 2016)を構築し維持・発展させるための知識とスキルを学習する機会をつくることも考えられる。さらに、それらの新しい学習方法を小・中・高等学校の英語の授業に取り入れる方策や、授業外学習として活用する方法について、実際に体験させ考えさせる授業の創造が期待される。

## 引用文献

- 浅野大介(2021)『教育DXで「未来の教室」を作ろう』東京：学陽書房
- 久保田賢一・今野貴之(編)(2018)『主体的・対話的で深い学びの環境とICT－アクティブ・ラーニングによる資質・能力の育成』東京：東信堂
- 立松大祐(2017)「アメリカのリテラチャー・サークル指導事例－EFL教室での指導に向けた示唆－」『愛媛大学教育学部紀要』64, 69-80.
- 立松大祐(2018)「主体的・対話的で深い学びにつながる「読むこと」の指導－コロラド州のミドルスクールでの事例－」『四国英語教育学会紀要』38, 43-54.
- 立松大祐・河野圭美(2020)「英文を読んで話し合う協同学習の授業モデルづくり－リテラチャー・サークルの実践から－」『英語授業研究学会紀要』28, 108-120.
- 立松大祐(2020)「リテラチャー・サークル実践と英語使用状況の予備的調査－中学3年生の話し合い活動の文字起こしから－」『愛媛大学教育学部紀要』67, 45-54.
- 立松大祐(2021)「リテラチャー・サークルにおける生徒の英語使用状況調査－中学3年生1グループの話し合い活動の分析－」『英語授業研究学会紀要』30, 57-69.
- 立松大祐(2022)「児童生徒による質問づくりを取り入れた英語の授業実践に向けて」『大学教育実践ジャーナル』21, 117-124.
- 内閣府(2016)「科学技術基本計画」<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/5honbun.pdf>(最終確認日2022年12月5日)
- 文部科学省(2018a)『中学校学習指導要領解説外国語編』東京：開隆堂
- 文部科学省(2018b)「Society 5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～(概要)」[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/other/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/06/06/1405844\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/06/06/1405844_001.pdf)(最終確認日2022年9月1日)

- 文部科学省(2020)「外国語の指導におけるICTの活用について」[https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt-jogai01-000009772\\_13.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt-jogai01-000009772_13.pdf)(最終確認日2022年9月1日)
- 文部科学省(2022)「令和3年度「英語教育実施状況調査」の結果について」[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1415043\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415043_00001.htm)(最終確認日2022年9月1日)
- Bromley, K., Faughnan, M., Ham, S., Miller, M., Armstrong, T., Crandall, C., Garrison, J., & Marrone, N. (2014). Literature circles go digital. *The Reading Teacher*, 68(3), 229-238.
- Fu, D & Matoush, M.M. (2015). *Focus on literacy*. Oxford University Press.
- Hanson-Smith, E. (2016). Teacher education and technology. In F. Farr, & L. Murray (eds), *The Routledge handbook of language learning and technology* (pp.210-222). Routledge.
- OECD (2018). Education2030: *The future of education and skills. position paper*. [https://www.oecd.org/education/2030-project/contact/E2030%20Position%20Paper%20\(05.04.2018\).pdf](https://www.oecd.org/education/2030-project/contact/E2030%20Position%20Paper%20(05.04.2018).pdf)(最終確認日2022年9月1日)
- Rothstein, D. & Santana, L. (2011). *Make just one change-teach students to ask their own questions*. Harvard Education Press.